

禅の友

Zen no Tomo

7

July 2019

特集
お盆を迎える





ご本山だより
大本山永平寺【螢火】

大本山永平寺 ☎〇七七六・六三・三一〇二

炎暑の候、深山に生る草木は、ぐん

ぐんと根幹を伸ばしております。根には、地面に広がる側根と、地中に垂直に伸びる直根があります。直根がしっかりといていないと、雨風によって流されたり倒されたりしてしまうそうです。ですから直根は、外からは全く見えなくとも、樹々が安心して生るには大切な根幹なのです。

さて、文月の永平寺では、日々の自らの行いが仏戒（仏の安らかな生き方）にかなっているか顧みる「大布薩会」を修行いたします。

永平寺では、日々の食事や言葉遣い、掃除や挨拶など、日常の生活をとのえ、和合していくことが最も大切な修行です。

永平寺をお開きになりました道元禅師さまは、次のようなお歌を詠まれます。

「あし引きの 山鳥の尾の長き夜のやみぢへだてて 暮らしけるかな」

山鳥のつがいが、谷を隔てて夜を過ぎ、その夜の長さ寂しさを歌っているようです。私たちも、出逢いや喜びもあれば、別れも悲しみもある、長い夜のようなこの世の中を生きています。その中で、私たちはいつたい何を灯としていけばよいのでしょうか。それは、日々の生活そのものです。

それぞれの足元にある、便所に行つて、ご飯をいただいて、寝る。この日々の生活の他に何もありません。正に、呼吸を調え生活をととのえて、自らの根幹を持ち、皆と和合して生きることのほかに何があるのでしょうか。大佛寺山の麓の川で闇夜に遊ぶ螢火に、足元を照らされ、我が身を顧みるものでございます。





ご本山だより

大本山總持寺

【み霊祭り】
たままつ

大本山總持寺 ☎〇四五・五八一・六〇二一



盆踊り前の施食会

總持寺では七月がお盆の時季となります。

本年は一日より十日まで施食会法要が行われます。毎日午後一時より法話があり、二時から法要となります。

特に七日（日）は江川禪師さまが大導師をお務めになられ、広い大祖堂が参詣者でいっぱいとなります。

施食会が終わると棚経の期間となり、檀信徒のご自宅に伺いお盆の供養をいたします。

十七日より十九日までの三日間は、大駐車場を会場に「み霊祭り納涼盆踊り大会」が行われます。

この行持は今年で七十二回目を迎えますが、もともと横浜大空襲と鶴見駅鉄道事故の犠牲者を慰霊するために行われました。

近年では東日本大震災や国内外の様々な自然災害による被災者への供養も込められて行われています。

また救世観音像と仏殿前参道での万灯供養も行われ、無数の灯火が行き交う人々を幽玄な光で包みます。

納涼盆踊り大会には毎年延べ人数で境内収容限度の十万人が訪れ、電飾や火花が会場を華やかに演出します。普段修行に励んでいる若い僧たちも、この時ばかりは浴衣姿となつて樽上や参加者の踊りの輪に入り、雰囲気盛り上げます。

横浜鶴見を代表する夏の風物詩として定着したこの行持を通じ、地域の方々に本山へ親近感を抱いていただくことはとても意義が有ることと思えます。

選・坊城俊樹

夕暮れを連れ来る風と行く枯野

兵庫県 待元 明子

評 なかなか凝った形式の句である。この風は、「夕暮れ」を連れてきて、そして作者と供に連れ添うように枯れた野を行く、というのである。俳句とはたった十七音でもってこんな素敵な物語を作ることができる。

浪に痩せテトラポットの春愁ひ

三重県 刈屋 奈良美

評 「春愁」とは何も人間にだけにあるとも限らない。時として、それを物に託すこともある。これもあるように、テトラポットの春愁なのである。冬の間の厳しい波濤によって削られたテトラポットの哀愁とも言える。

◆ 幼子の欠伸のんどに春日射す

島根県 藤江 堯

◆ それぞれに五百羅漢の春愁ひ

埼玉県 小林 茂之

◆ 襖絵の龍の眼光る春の雷

愛知県 大竹 妙子

◆ 寺の庭八重の絞りの大椿

岡山県 有元 克英

◆ 濁声の甘酒売るや花月夜

神奈川県 堀田 耕一

◆ 春潮をよそほひフェリー入港す

北海道 堺 隆

◆ 竹やぶのゆれて山藤ゆれにけり

山口県 御江 恭子

◆ 花茗荷父に押されて嫁ぎ行く

秋田県 田村 恵美子

◆ 彼岸会の僧のはしほし尾張弁

愛知県 戸田 清子

◆ 禅寺へ石段険しすみれ草

岐阜県 大下 雅子

選者吟

黒塀の永久に黒かり紫木蓮

俊樹

作句小見 東京は下町の元料亭のあたりで吟行をしていた。その料亭はすでに廃業をしたのか、人の出入りはない。不思議なことは、その塀の隙間から見えた紫木蓮だけは、むらさきの大輪の花を咲かせていた。何かの名残りのしるしだったのか。

選・長澤 ちづ

風の音を聴くためだけに建てられし屋やくのあるらし桂離宮には

鳥根県 横山 豪吾

評 桂離宮は江戸時代初期創建の宮家の別邸。簡

素で機能的な建築美をブルーノ・タウトが絶賛したことでも知られる。作者は生活とは掛け離れた雅みやびな美意識に思いを馳せる。「風の音を聴く」という焦点の当て方に詩心を感じられる。

亡き父母の命の余韻とぞ思ふ吾の耳鳴りに聴き入る夜更け

秋田県 小松 紀子

評 耳鳴りを鬱陶しいものと否定的に捉えず「父母の命の余韻」と受け止め独特の視点で詠う。

亡き人はそうやって生者の中に蘇る。優しい心情と命の不思議を思う一首である。

◆ 入学試験終へて日の差す縁側に猫と戯る子に声かけず 鳥取県 眞山 博充

◆ 美術館通りのけやき角ぐみて木下關するときは間近し 静岡県 望月 孝

◆ これからの希望のやうな少女乗る自転車ぐうん春の堤防 岐阜県 後藤 進

◆ 花嫁の白きドレスと競うがにチャペルの庭の花水木ゆれ 埼玉県 橋本 永子

◆ 一首だけ毎日詠むと決めてから世界の色が輝き出せり 埼玉県 新井 巳喜雄

◆ 吾が墓はひと枝のみで足りまする妻が遺したコヒガンザクラの 福島県 佐藤 忠

◆ 旅に来て古書店巡る夕まぐれ風は優しく頬を撫でゆく 広島県 小畑 宣之

◆ ブランコが外されフレームだけ残る青空広し予らの声無し 奈良県 鈴木 重雄

◆ 郭公の鳴けばさみしも逝きませる母かとぞ想い木の梢仰ぐ 福島県 大槻 弘

◆ 麦刈れば子らの寄り来てストローでシャボン玉飛ばせし初夏なつかし 三重県 西村 廣視

選者誌

空海の立体曼荼羅抜け出せば上野の森は新緑曼荼羅 ちづ

作歌小見 今回の投稿歌は力作揃いで選歌にうれしい悲鳴をあげました。生命力溢れる季節の所為でしょうか。拙歌は東京国立博物館

で開催された東寺展見学の折のもの。受験生の微妙な心理を気遣い、遠巻きに見守る眞山さんの歌も味わい深い。